

きょうだい間会話の敬語

— 文学表現と口頭表現 —

The Honorifics of Conversation between Brothers and Sisters

— On Literary and Oral Expressions —

壬生 幸子*

Sachiko Mibu

1. 本稿の意図と問題点
2. 『古事記』のきょうだい間会話
3. 近代小説のきょうだい間会話—『それから』
『おとうと』
4. テレビドラマシナリオのきょうだい間会話—
『はね駒』『北の国から'89帰郷』
5. 家庭の実生活場面でのきょうだい間会話
6. 結論

1. 本稿の意図と問題点

本稿に与えられた課題は、一般生活場面での会話と人間関係の分析である。本稿では、会話のうち1対1の対話、なかできょうだい間会話の敬語表現に的を絞る。ここでいうきょうだいとは、近代以降の資料については原則として同父、同母とする。同時、同一空間において行われる会話を資料とし、きょうだいの1人が一方的に話すケースや、応答が省かれているケースは対象から外し、原則的に言葉のやりとりのあるケースに限定した。会話時の状況やきょうだい間の関係性が、敬語表現にどのように反映するかを考察する。はじめに考察の意図と問題点を述べる。

きょうだい間会話の収集は、散文文学作品と家庭の実生活のなかから行った。本稿考察の第

1の問題は、文学作品という文字表現と、実生活の会話という口頭表現を同時に扱うことである。

もとより口頭表現と文字表現とは異質である。文学作品の会話は口頭表現として記述されているが、実生活における生の会話ではない。あくまでも文字表現における擬似的口頭表現である。シナリオも、演技者の口を通して表現されることを前提として記述されたものではあるが、実生活の生の口頭表現ではなく、文字によって表現される。すなわちこれらの会話は、作者の意図する人間関係を表現するために、作者の実生活における体験的会話が模倣的に再現され、またはデフォルメされて創られているものと考えられる。これを実生活の会話と同質に扱うことはできないが、実生活の会話の特徴のパターン化された表現をみることはできる。本稿ではこうした視点から、文学作品と実生活の会話を同時に考察の対象とする。

第2の問題は、収集したきょうだい間会話の条件が異なり、また例数が少ないことである。作品のなかから会話資料を収集する場合、条件をそろえることは困難であり、きょうだいの性別、年齢、居住地、家庭環境等はそれぞれに違う。厳密な意味での比較が成り立ちにくい。だが本稿は、会話例数を多く採集して数量的処理

* 基礎教養課程

を行い傾向性を指摘することに目的を置いていない。冒頭に述べたように、一般生活場面での会話と人間関係の分析が与えられた課題であり、各ケースにおけるきょうだいの状況的、心理的關係が敬語表現に与える影響を考察することが目的であるので、例数や条件の問題は障害にならないと考える。

第3の問題は、収集した会話の言語的側面を中心として考察せざるを得ないことによる会話研究の限界性である。

会話のコミュニケーションは、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションによって行われる。芳賀純¹⁾によれば、非言語コミュニケーションには、パラランゲージ(paralanguage, 声の特徴)、キネシックス(kinesics, 視点, 表情, 身振り, 行動など)、プロクセミックス(proxemics, 距離のとりかた)、クロネミックス(chronemics, 時間の用い方の慣習)の諸領域がある。またA. マレービアン²⁾によれば、会話中の感情表現の総計を100%とした場合、顔による表現はそのうち55%, 声による表現は38%, 言葉による表現は7%である。

文学作品は、地の文及びト書きによって作中人物、登場人物の非言語コミュニケーションが記述されるが、その表現は必ずしも十分ではない。実生活で収集した会話においても、非言語コミュニケーションの読取りには限界がある。これは本稿のみならず、会話研究全般について言い得る限界性であろう。そのうえで、きょうだいの関係性や言語化されない状況が敬語表現に及ぼす影響を考えたい。

第4の問題は、きょうだい間会話の敬語表現の考察という設定にある。きょうだい間の敬語は、基本的に家庭内敬語の一種と位置づけることができようが、一般に家庭内敬語の研究対象とされるのは夫婦間敬語、親子間敬語で、きょうだい間敬語の問題を正面から扱った先行研究は多くない。

南不二男³⁾は、敬語使用の外的条件のうち人間関係の条件として、性別、所属階層・地位・立場、上下関係、親疎関係をあげるが、きょう

だい間においてはその親しさから性別、上下関係等を捨象して会話を行うこともままある。その意味で会話における敬語研究の対象として扱いにくい側面があるものと考えられる。だが逆に社会性の薄い家庭内のきょうだい間に敬語が用いられるケースを考察することは一定の意味をもつものと考えられる。

以下各論に入るが、引用した会話中、尊敬語には――、謙讓語には＝、丁寧語には～を付した。

2. 『古事記』⁴⁾のきょうだい間会話

『古事記』は、712年(和銅5)成立の現存最古の成書とされる。その物語部分は地の文、会話文、歌謡から成る。この会話文は日本の散文学中での会話文の始発というべきものである。はじめに『古事記』のきょうだい間会話の考察にあたっての問題点を述べる。

『古事記』は、その記述する時代及び成立当時の身分制社会を反映し、神々や人々の上下関係を明確に書き分けている。身分差のある場合はもちろん、親子間においても上下関係を明示する表記、表現がとられるのが原則である。これに準じて考えれば、きょうだい間も年長者、年少者の上下関係を明示した表記、表現があってしかるべきと思われるが、必ずしもそうっていない。きょうだい間については、上下関係が明確なケースと対等関係であるケース、またどちらとも決められないケースがあって混沌とした様相を呈している。したがって逆にこの様態を考察することは、『古事記』のきょうだい間会話の敬語表現の原則を見だし、本稿の目的であるきょうだい間敬語表現の意味を探る手がかりになるものと思われる。

きょうだい間会話は、現代にあっては基本的に家庭内敬語の一種と位置づけ得るが、『古事記』の記述する時代の家族、家庭のありようは明確でない。『古事記』は神代から推古天皇の時代までを記述する。時代や階層、地域によって家族形態に相違もあろう。同母の場合はきょう

うだい同居，異母の場合はそれぞれの母のもとにきょうだい別居するのが一般と思われるが，明確な証拠はなく一概に断定できない。すなわち，きょうだいの環境的，心理的親疎がそれぞれのケースで確定しにくい側面をもつ。

1章で，本稿で扱うきょうだいについて，近代以降の資料については原則として同父同母とする旨を述べた。『古事記』のきょうだいは，同父母，異父母，いずれにあたるか不確実なケースがある。後掲(2)(6)は同父同母兄弟，(4)は同父異母兄弟であることが系譜から確認できる。だが(1)は母胎から生れたものでなく，父の“みそき”によって生れた姉弟である。(3)は名前が対であることから同父同母兄妹とも思われるが，確実ではない。(5)は同母兄弟であるが，父が同一か否かは不明である。(7)(8)は同父兄弟であるが，母が同一か否かは不明である。

本稿では『古事記』のきょうだいについては，同父母，異父母を問わず資料として扱うこととする。近代以降と異なる家族構造のもとにある古代のきょうだいについて，同父母，異父母を峻別することに大きな意味を認めにくいからである。

また，会話文の敬語の訓読についても問題がある。『古事記』の敬語表記は，後世の文章におけるように明確とはいえない。本居宣長は「凡て御座賜奉などの字は，多くは略けるに，往々又添ても書る處のあるを以て，餘をも准へ訓べし」⁵⁾と述べ，他に表記された箇所のある敬語表現は訓み添えるべきであるとした。だがこの訓法については異見もある。

本稿では，確実な敬語表現の文字表記のある箇所を敬語と認め，確実な文字表記のない箇所については除外する。また会話を導く地の文の表記に会話者の上下関係が明示されるのが一般であるので，これを採用して考察することとする。

以下に前述の基準に合致する『古事記』のきょうだい間会話の全例をあげ，その様態を考察する。なお，イザナキとイザナミについてはきょうだい説があるが，本稿ではその説を採らず，

対象から除外した。また，歌謡のやりとりについては，広い意味で会話体ととらえる見方もあろうが，本稿では通常の会話と認めない立場をとり，対象から除外した。

(1) アマテラスオホミカミ（姉）とスサノヲノミコト（弟）

「何故上来」余，速須佐之男命答曰，「僕者無邪心。唯大御神之命以問賜僕之哭伊佐知流之事故白都良久『僕欲往妣国以哭』。余，大御神詔『汝者不可在比国』而神夜良比夜良比賜故，以為請將罷往之状参上耳。無異心」。余，天照大御神詔「然者汝心之清明，何以知」。於是，速須佐之男命答曰「各宇氣比而生子」

スサノヲノミコトが父イザナキノオホミカミの命に従わず海原を統治しなかったため，イザナキは怒ってスサノヲを追放する。スサノヲは，根之堅州国に赴く前に姉にあたるアマテラスオホミカミに暇乞いをするため，アマテラスの統治する高天原に昇る。その折りの，自分の統治する国を弟が奪おうとしていると疑うアマテラスと，異心のないことを告げるスサノヲとの，姉弟間会話である。

姉の会話を導く地の文には尊敬の動詞「詔」，弟の会話を導く地の文には謙讓の動詞「白」が用いられる。また弟の会話文中には謙讓の一人称「僕」謙讓動詞「罷」「参上」が用いられ，姉が上位者，弟が下位者であることが示される。⁶⁾

ここで弟の会話文中に用いられる謙讓の一人称「僕」に注目したい。引用部分の先後の文脈における弟の一人称をみると，引用部分に先立つ文脈で，国を統治しない理由を問い質された時には，「僕者欲罷妣国根之堅州国故哭」と，「僕」を用いて父に返答している。引用部分の後，姉とのうけひの結果，清明心が証明され弟の勝利が明らかになった時点では，「我心清明。故我所生之子得手弱女。因此言者自我勝」と，「我」が用いられる。すなわち，父や姉に糾明

される場面、弟の側に負い目のある場合は謙讓の一人称「僕」が用いられる。負い目が消え、身の潔白が明らかになり、状況的、心理的に優位に立つ場面では通常の一人称「我」が用いられる。相手方との状況的、心理的な優劣関係が一人称に謙讓語を用いるか否かに表れるものと考えられる。

『古事記』の神話体系におけるアマテラスオホミカミは皇統譜の祖先神であり、その位置は大きい。またスサノヲノミコトからすれば姉にあたる。だが、そうした弟にとっての姉の優位性は状況的、心理的要因によって変動することが認められる。

(2) ホデリノミコト (兄) とホヲリノミコト (弟)

於是、其兄火照命乞其鉤曰「山佐知母、已之佐知佐知、海佐知母、已之佐知佐知。今各謂返佐知」之時、其弟火遠理命答曰「汝鉤者、釣魚不得一魚、遂失海」

いわゆる海幸山幸の神話である。引用部分は弟のホヲリノミコトが海神の宮に行く以前の兄弟間会話で、上下関係を認めるような敬語表記はなく、対等関係の会話である。引用部分の後段、兄が弟に服従する場面の兄の言葉は「僕者自今以後、為汝命之昼夜守護人而仕奉」である。兄は謙讓語の一人称「僕」を用い、弟に対して敬語の二人称「汝命」を用い、謙讓語「仕奉」を用いる。その会話を導く地の文には、これが下位者の上位者に対する会話であることを示す「白」が用いられている。弟が海神の宮での体験を経て兄の上位者となるまで、兄弟の関係は対等と考えられる。

(3) サホビコノオホキミ (兄) とサホビメ (妹)

沙本毗売命之兄、沙本毗子王、問其伊呂妹曰「孰愛夫与兄歟」、答曰「愛兄」。余、沙本毗古王

謀曰「汝、寔思愛我者、將吾与汝治天下」而、即作八塩折之紐小刀、授其妹曰「以此小刀刺殺天皇之寢」

妹のサホビメは垂仁天皇の後となっているが、この身分差にもかかわらず、兄サホビコノオホキミの会話を導く地の文に謙讓の動詞は記されず、会話内にも妹に対する敬語表現は認められない。兄妹の会話は対等関係と認められる。身分的に下位者である兄が、謀反の決意を固め、天皇の後となった妹に荷担を促すケースで、下位者の側に上位者に対する敬意のない特殊例と考えられる。

(4) オホヤマモリノミコト (兄) ウチノワキイラツコ (弟)

即問其執楫者曰「伝聞茲山有忿怒之大猪、吾欲取其猪、若獲其猪乎」。余、執楫者答曰「不能也」。亦問曰「何由」。答曰「時々也往々也、雖為取而不得。是以、白不能也」

これは、弟のウチノワキイラツコが、兄のオホヤマモリノミコトが自分を殺そうとしていることを知り、船の楫取りに変装して兄と交わす会話である。兄の側には相手が弟であるという認識はなく、兄弟間会話としては異質である。

会話を導く地の文の敬語表記からは、両者は対等関係と認められるが、最後の弟の会話に謙讓の動詞「白」が用いられ、弟が下位者であることが示される。兄は皇子であり、弟は「服布衣禪既為賤人之形、執楫立船」と、賤人の姿形に身をやつしているのであるから、これは弟であるゆえの謙讓表現ではなく、皇子に対する賤人としての謙讓表現とみるべきであろう。

会話を導く地の文で、弟が賤人を装っているにもかかわらず兄弟が対等関係であるのは、父先帝から皇位継承者として指名された弟を殺そうとする兄を反逆者と認めていることのあらわれと考えられる。

(5) アキヤマノシタヒヲトコ (兄) とハルヤマノカスミヲトコ (弟)

故、其兄謂其弟「吾雖乞伊豆志袁登壳，不得婚。汝得此孃子乎」答曰「易得也」。余，其兄曰「若汝有得比孃子者，避上下衣服，量身高而釀甕酒，亦山河之物，悉備設，為宇礼豆玖」云余。

この会話に上下関係を示す表現はなく，兄妹2神は対等関係で会話を行っているものと考えられる。この説話は皇統譜と無関係の挿入部分で，皇統との関わりにおける地位的な上下関係はない。

(6) 履中天皇 (兄) とミヅハワケノミコト (弟)

於是，其伊呂弟水齒別命参赴令謁。余，天皇令詔「吾，疑汝命若与墨江中王同心乎。故，不相言」。答曰「僕者無穢邪心，亦不同墨江中王」。亦令詔「然者今還下而，殺墨江中王而上来，彼時吾必相言」

この会話は同時，同一空間でのものではない。地の文に「令謁」「令詔」と使役表現があるのは，間に使者が立ってのやりとりであることの証左である。会話採用の原則から外れるが，弟の面会要請をめぐってのやりとりであって，会話間に長い時間差があるとは考えにくい。同時，同一空間の会話に準ずるものと認めて採用した。

天皇である兄の会話を導く地の文には尊敬の動詞「詔」，弟の会話を導く地の文には謙讓の動詞「白」が用いられる。また兄の会話内には尊敬の二人称「汝命」が，弟の会話内には謙讓の一人称「僕」が用いられる。兄の会話内に尊敬の二人称が用いられるのは，弟が兄の次代の天皇位につく人物であることの反映とも考えられる。全般的には兄であり天皇である立場の兄が上位者，弟が下位者として会話が行われていると認定できる。

(7) オケノオホキミ (兄) とヲケノオホキミ (弟)

余，其一少子曰「汝兄先儻」，其兄亦曰「汝弟先儻」

弟が先に皇位を継ぎ（顕宗天皇），兄は弟の次代の天皇となった（仁賢天皇）。この会話部分は兄弟ともまだ皇位継承していない少年期のものである。敬語表現はなく対等関係にある会話と認められる。

(8) オケノオホキミ (兄) と顕宗天皇 (弟)

其伊呂兄意祁命奏言「破壊是御陵，不可遣他人。專僕自行，如天皇之御心，破壊以参出」。余，天皇詔「然，随命宜幸行」。是以，意祁命自下幸而，少堀其御陵之傍，還上復奏言「既堀壞」。余，天皇異其早還上而詔「如何破壞」。答曰「少堀其陵之傍土」。天皇詔之「欲報父王之仇，必悉破壞其陵，何少堀乎」。答曰「所以為然者，父王之怨，欲報其靈，是誠理也。然，其大長谷天皇者，雖為父之怨，還為我之從父，亦治天下之天皇。是今单取父仇之志，悉破治天下之天皇陵者，後人必誹謗。唯父王之仇，不可非報。故，少堀其陵辺，既以是耻足示後世」。如此奏者，天皇答詔之「是亦大理。如命可也」

(7) のケースの後，弟が皇位継承してからの会話である。弟である天皇の会話を導く地の文には尊敬の動詞「詔」，兄の会話を導く地の文には謙讓の動詞「奏」「白」が用いられる。兄の会話内には謙讓の一人称「僕」，弟天皇に対する尊敬語「御」が用いられ，兄弟間の長幼より身分差が優先した敬語の上下関係になっている。弟天皇も兄に対して「命」「幸行」といった天皇に準ずる尊敬表現を用いて兄を立てているが，天皇が上位者であることは動かない。

上記8例の会話から帰納される『古事記』のきょうだい間会話における敬語採用の原則を述べる。

優先される条件は、きょうだい間に生じた身分差であると考えられる。(6)(8)のようにきょうだいの一方が皇位につくような場合である。

(1)も、身分差のあるケースに準じて考えられる。アマテラスは父のイザナキから3人兄弟のうち1人だけ御頸珠を与えられ、高天原の統治を命じられた神である。引用部分の時点では皇統譜につながる神であることは未だ記されないが、出生時から特別の扱いを受けている。きょうだい間に身分差のあるケースに準じてとらえてよいと思われる。

ただし(3)のような例外もある。先に述べたが、(3)は身分的には下位者である兄が、謀反の決意を固めて天皇の後となった妹に荷担を促すケースで、下位者の側に上位者に対する敬意のない特殊例と考えられる。また(1)や(8)にみられるように、状況的、心理的な力関係の変動が生じたときや、相手に対する敬意がある場合、身分差には緩和傾向があらわれる。身分差がない場合、きょうだい間には基本的に、親子間にみられるような上下関係をあらわす明確な敬語表現は生じないものと考えられる。

3. 近代小説のきょうだい間会話 — 『それから』『おとうと』

表1 家族どうして敬語を使うか(性, 年齢, 学歴別)

	(ときに使う)		使わない		無回答	
	前回	今回	前回	今回	前回	今回
男	28.6	15.4	69.2	83.5	2.2	1.1
女	46.8	27.7	50.0	70.2	3.2	2.1
30代後半	18.8	12.5	75.0	87.5	6.3	—
40代	39.1	10.9	60.9	89.1	—	—
50代	49.1	25.5	50.9	74.5	—	—
60代	40.0	27.5	55.0	70.0	5.0	2.5
70代	21.4	28.6	71.4	64.3	7.1	7.1
低学歴	32.8	14.8	63.1	82.8	4.1	2.5
中学歴	50.0	34.1	50.0	65.9	—	—
高学歴	42.1	36.8	57.9	63.2	—	—

注8) 掲出書 p.230 表8-22 を転載

1972年の愛知県岡崎市における調査⁸⁾では、1952, 53両年の調査に比べ、家族間では敬語を使用しない人が60%から77%に増加したことが報告されている。この報告では、家族間の敬語使用は、男性より女性に多く、年代が低いより

高いほうが多く、低学歴者より高学歴者に多い傾向が認められる(表1)。

こうした家族間の実際の家庭内敬語の傾向は、近代小説のきょうだい間会話の様態と同様であろうか。1909年に朝日新聞に連載が開始された夏目漱石の小説『それから』と、1956年に「婦人公論」に連載が開始された幸田文の小説『おとうと』をとりあげ、考察する。

(1) 『それから』⁹⁾

— 長井誠吾(兄)と長井代助(弟)

其中に兄も居た。

「やあ、来たな」と云つた儘、帽子に手も掛けない。

「何うも、好い天気ですね」

「あゝ、結構だ」

代助も背の低い方ではないが、兄は一層高く出来てゐる。其上この五六年来次第に肥満して来たので、中々立派に見える。

「何うです、彼方へ行つて、ちと外国人と話でもしちや」

「いや、真平だ」と云つて兄は苦笑ひをした。さうして大きな腹にぶら下がつてゐる金鎖を指の先で弄つた。

「何うも外国人は調子が可いですね。少し可すぎる位だ。あゝ賞められると、天気の方でも是非好くならなくつちやなくなる」

「そんなに天気を賞めていたのかい。へえ、少し暑過ぎるぢやないか」

「私にも暑過ぎる」

(中略)

「今日は御父さんは何うしました」

「御父さんは詩の会だ」

誠吾は相変らず普通の顔で答へたが、代助の方は多少可笑しかつた。

「姉さんは」

「御客の接待掛りだ」

(中略)

「兄さん、貴方に少し話があるのだが、何時か暇はありませんか」

「暇」と繰り返した誠吾は、何にも説明せずに笑って見せた。

「明日の朝は何うです」

「明日の朝は浜迄行って来なくつちやならない」

「午からは」

「午からは、会社の方に居る事はゐるが、少し相談があるから、来ても緩くり話しちやゐられない」

「ちや晩なら宜かろう」

「晩は帝国ホテルだ。あの西洋人夫婦を明日の晩帝国ホテルへ呼ぶ事になつてるから駄目だ」

代助は口を尖がらかして、兄を凝と見た。さうして二人で笑ひ出した。

「そんなに急ぐなら、今日ちや、何うだ。今日なら可い。久し振りで一所に飯でも食はうか」

主人公長井代助は30歳で、大学を卒業した学士である。兄長井誠吾の年齢は不明だが、その長男は15歳になる。また誠吾と代助の間には、早世した2人の男子と、生存する1人の女子のきょうだいがある。これらの設定から、兄弟の年齢差は少なくとも5歳ほどはあろうかと考えられる。弟は独身で、兄のいる本家から出て別家を構えている。居住地は兄弟とも東京である。

この引用部分のみならず、小説『それから』において、代助は父に対しても兄に対しても兄嫁に対しても、一貫して丁寧語を主体とする敬語を使用して会話をしている。ただし父と兄は代助に敬語を使用しないのに対して、兄嫁は代助に敬語を使用する。明治時代の実業界で成功した士族の家が小説の舞台であり、最高学府を出た学歴の持ち主が主人公であるから、当時の家父長制及び男尊女卑の倫理意識が、登場人物の会話の敬語表現に反映しているものと考えられる。また代助は高等遊民で、「食うために働く」人間に違和感をもっており、兄に対しても異質さを感じている。そうした意識が他人行儀とも見ることのできる敬語となってあらわれているとも考えられる。ただし代助が主に用いる敬語は丁寧語であるから、敬意が高いとはいえず、兄に対する近親者からの軽い敬意の表れともみることができる。

代助と家族の関係が円満である小説の始めの時点においても、終末部の代助が勘当される時点においても、上記のような敬語使用の傾向は変動しない。裕福な家庭環境と高学歴によって培われた理知的な代助の性格が、この敬語使用傾向の安定性に表現されているものと考えられる。

(2) 『おとうと』¹⁰⁾ 一げん(姉)と碧郎(弟)

「咯血する人は血が減つたことがその場ではつきりわかるわけだけど、おれのやうにかう咯血もなにもしないものは、いつたいつ血が減るんだらうね? ふしぎだね。」

「血が減つてるような気がするの?」

「あゝたしかに減つてるんぢやないかと思うな。—それに、へんな話だけど、静脈の血ばかり多くなつちまつて、動脈が空っぽになつたやうにも思ふんだ!」

(中略)

「ねえさん、縁談どうした? おれの看病なんか構はないで、どんゝ好きにしてくれたらいいんだ。」—さきごろ断つた縁のあとがまた一ツ齧されてゐた。碧郎はそれを云ふのだが、げんは到底結婚なんか夢みてはいけないと思つて気にとめてゐない。

「あゝあの話ね。とりたてゝ行く気もしないから困るのよ。どうでもいゝような心持なんだから、纏まらないうかがかへつていゝんぢやない?」

「ふうん。」

(中略)

さつと時間に先生が来て、さつと薬を塗つて、さつと煙の立つ鍋を運んで行つた。「さ、碧郎さん、どう?」

「うん。」枕のわきへ運びつけられた鍋を、窮屈な眼の位置から眺め、ことさら鼻に嗅いでみてゐる。にやあつと笑つた。

(中略)

二夕匙三匙、碧郎は満足げにたべた。それからふつと疑はしげな眼つきになると、げんを見つめた。「ねえさん おあがりよ。」

「え? なぜ? もういやになつたの?」

「そぢやないんだ。いゝから、そつちのはじから
おあがりよ。」

「だつて、……どうしたのよ?」

「……ねえさんと一緒にたべてもらいたいと思っ
ただけなんだ。」

小説の始まりにおいて姉は17歳、弟は14歳である。引用部分の時点では姉は22歳、弟は19歳になっている。時代設定は関東大震災前後、大正末期から昭和初期と推定できる。父は高名な作家、継母は敬虔なクリスチャン、姉は女学校出、弟は中学校から正規の学校でない予備校を渡り歩いているという家族設定で、当時の中流家庭と考えられる。居住地は東京の向島界隈である。

姉は弟を「碧郎さん」と敬称をつけて呼ぶ。弟は姉に対して「おあがり」といった尊敬語を使用する。だが形式的に格別整った敬語表現とはいえず、姉弟の情愛のこもった会話である。互いを敬愛する対等の姉弟関係ということができよう。

近代小説におけるきょうだい間敬語をわずかな例から論断することはできないが、敢えて傾向性を指摘しておきたい。小説の会話は創作されたものであるが、各時代の実際の会話の特徴が創作的に再現されているものと思われる。先に引用した岡崎調査において、家族間の敬語使用が、20年を経て減少していることが報告されたが、家父長制や男尊女卑意識の衰退が家庭内敬語の使用傾向に影響を与えていることが推測できる。小説における設定年代が下がるに従って、会話文の敬語使用頻度が減少傾向をとる蓋然性は高いものと思われる。

4. テレビドラマシナリオのきょうだい 間会話

—『はね駒』『北の国から'89帰郷』

(1) 『はね駒』¹¹⁾

—橋嘉助(兄)と橋りん(妹)

橋りん(姉)と橋みつ(妹)

a

嘉助「けっこう、けっこう、木綿の唐棧とはこりゃ
オツリキですぜ……似合うかい?」

りん「のんきなこと云って……似合わないヨ!」

嘉助「しかし、お前、いつもこんな地味なもの着
てるのかい……よし! 今度兄ちゃんが、華族
さまの娘が着るような、バアとしたきれいな
袖の長い着物買ってやるからな」

りん「そんなもの、買ってくれなくてもいいから、
兄ちゃん、今度はおもちゃんとして、家さ
戻ってきななィ」

嘉助「……」

りん「父ちゃんも母ちゃんも、じいさまもばあさ
まも、みんな、兄ちゃんのこと心配してたん
だよ。父ちゃんは何も言わねえけど、兄ちゃん
の話が出たあとはいっつもお酒をうんと飲
むんだ……兄ちゃんのこと、みんな、待って
んだよ!」

嘉助「わかっている、わかっている、男はこう
と決めたら、行かなきゃならねえ道があるんだ。
(少し芝居がかった)……もう少し目
をつぶって、待っててくれ。そのうち、海の
向こうのハイカラみやげ、山ほど抱えて帰っ
てきて、お父っつあんもおっ母さんも、みや
げ漬けにしてやるからな。楽しみにしてな!」
りん「(溜息ついて) そうか、ほんじゃ、楽しみに
してっから……兄ちゃん、これ……(お金
を出して) 海の向こうさ行くには、ちょっと
足りねえべ?(笑う)」

さし出したお金を見つめる嘉助——

嘉助「これ……お前の金か?」

りん「ホだ、だからこれっぽっちしかないけど、
安心して使っていいよ、兄ちゃん」

嘉助——ぐっときている……

りん、硬貨を兄の手の中に渡す。

その、りんの手を握りしめる嘉助。

嘉助「ありがとよ、おりん……兄ちゃん、この金をモチデにして必ず商売で成功してみせっから。そして大おきな家建ててみんなを呼びよせてやっからな……約束するよ」

りん「頑張ごんぢやうってな、兄ちゃん」

りん「さて、それじゃ……といっても、この格好じゃ明るいうちは目立めだってすぐ追っ手にとっつかまつかままちまうまうまな」

りん「暗くなるまでここさいたほうがいいよ。夜になってから出ていけば……」

b

りん「(拭きながら) 冷やっこくて、気持ちいいべ?……今日は暑いから、あせもができねえようにしねっか……」

みつ「(細い声で) ごめんなな……暑いときに、こんな手間かけさせて……」

りん「また……お前は何も気をつかうことないの!……自分の体なおすことだけ考えていればいいんだよ……今晚は何作してもらって食べっかなあ……って、そんなこと考えていればいいんだ」

みつ「……」

りん「……暑いから、何も食べる気がおここないべげんと、食べねっか元げん気げんが出でねえから……」

みつ「姉ちゃん……」

りん「ン?……何か食べたいもの、あっかい?」

みつ「……姉ちゃん、ややこも暑いときは、乳を飲まなくなるんだべか……」

りん「……」

みつ「……わたスのややこ……ちゃんと飲んでるべか……他人の乳でも、いやがらずにちゃんと飲んでるべか……」

りん「……飲んでるよ、ややこは育うつ力ちからが強つよいんだから、きつきつととししかり飲んでっべ。ややこに負けねえように、おみつも飲のんだり食たべたりしねっか……」

みつ「姉ちゃん……わたス、いつ、ややこを見られるようになるんだべ……抱かいて、乳をやれるようになるんだべ……」

りん「……」

みつ「姉ちゃん……」

りん「しっかり食べて、しっかり休んで、体が元気になれば、すぐにでもそれができるようになんだから……さ、あんまりしゃべると、また、疲つかれてしまうから……もう、黙もって、少し眠ねりな」

テレビドラマ『はね駒』は1986年にNHK全国放送で放映された。シナリオ作者は寺内小春である。ドラマの時代設定は1890年から始まる。主人公の橘りんは、1877年に福島ふくしまの相馬さうまで生まれたという設定である。りんの家は士族で、父は戊辰戦争ごしんせんに参戦さんせんした経歴けいれきがあり、ドラマの時点では古物商こぶつしょうを営いんでいる。母は商家かみやの出身である。家族の生活は楽たのしみではない。

引用した会話の設定時点は、aが1890年、兄20歳、妹14歳である。bが1896年、姉が20歳、妹が18歳である。a bの兄妹、姉妹どちらの会話にも家族相互の敬称以外の敬語表現が見あたらない。引用部分以外のシナリオでも、きょうだいの母は夫であるきょうだいの父に対して格別な敬語を用いない。時代設定や士族という家柄などを越えて、家族の情愛と親密さを強調する作者の意図があるものと考えられる。とくにきょうだいどうしの隔へだてなく親おしい会話は、彼らの仲なつのよさを強調している。

(2) 『北の国から'89帰郷』¹²⁾

— 黒板純(兄)と黒板螢(妹)

a

二階

純。物音に目をさます。

螢が何かゴソゴソやっている。

純「螢」

螢「ゴメン。起こした。お帰かえンないさい」

純「今何時?」

螢「四時半」

純「まだ起きてンのか」

螢「今起きたとこ。これから出かけるの。

父さんも起きてる」

b

二階

寢床の中の純と蛭.

純「起きてるか？」

蛭「起きてる」

間.

純「今日父さんに初めてきいたんだ。春からお前、旭川に行っちゃうのか」

蛭「——」

純「おれそんなこといえないんだけど」

蛭「——」

純「父さん一人になっちゃうのか」

蛭「——」

間.

純「今日見たんだけど——父さん丸太小屋——」

蛭「——」

純「あれ——、おれたちのこと、待ってるのかな」

蛭「——」

純「おれたちが帰るの期待して丸太小屋」

蛭「その話今しないで」

純「——」

間.

蛭「その話されると、私泣いちゃうから」

間.

「わかった」

窓外

雪がしんしんと降っている。

二階

二人.

「いいやつか、そいつ」

「——」

間.

純「東京に出ると——行ったきりになるのか」

長い間.

蛭「(声がふるえる) お願い, お兄ちゃん. その話もしないで」

純「——」

テレビドラマ『北の国から'89』は1989年にフジテレビ系全国ネットで放映された。シナリオ

作者は倉本聡である。時代設定は放映年と同じ1989年。兄は17歳で、東京の夜学に通い、昼は働いている。妹は16歳で、昼は病院に勤めながら、旭川にある定時制の看護学校に通っている。兄妹の父は兄妹の母と離婚後、出身地の北海道富良野で農業を営んでいる。父は大学卒ではなく、息子を大学に進学させたいと考えている。

兄妹の会話には、挨拶敬語「お帰ンなさい」と家族相互の敬称以外に敬語表現はなく、情愛のある親密な関係がうかがわれる。

小説、テレビドラマシナリオともに、時代設定と執筆時点とが隔たる場合、どちらの時代の敬語意識が作品の会話を規制するかという問題点がある。これについては基本的に作者の時代、執筆時点の敬語意識が優先するものと考えられる。この傾向はシナリオに、より顕著にあらわれるものと思う。テレビの視聴者に違和感なく享受されるためには、放映時点での敬語意識に即した表現が必要になるものと考えられる。

近代小説、シナリオとも、きょうだい間会話の基本的ありようは、幸田文『おとうと』、寺内小春『はね駒』、倉本聡『北の国から'89』にみられるような情愛のある対等関係といえるであろう。夏目漱石『それから』の代助が兄に対して敬語を使用するケースは、家父長制下の擬似的身分差ともとらえられるものであると思う。

5. 家庭の実生活場面でのきょうだい間会話

会話の採録は1995年8月20日、会話者は兄9歳(小4)、妹6歳(小1)の兄妹である。この2人に他のきょうだいはいない。居住地は東京である。a b cの3場面で採録した。本稿の目的であるきょうだい間会話はa場面であるが、b場面の家族以外の人との会話、c場面の母との会話も引用し比較することによって、きょうだい間会話の特徴が顕著になると考えられるので、ともに載せる。

a

- 兄 はい、どうぞ、ちょうだい。こっちだよ。こっ
ち。あ、行きすぎ。
妹 へーさんが来たのに。
兄 へーさん。
妹 明るくして、ここ。
兄 ここじゃだめ？
妹 灯りのところでやる。
兄 へーさん、こんにちは。灯りがついたよ。
妹 こんにちは。
兄 今日はどんなお話ですか。
妹 明るいまぼろしの世界です。
兄 ワン。それじゃ、おねがいします。ハロー、
ハロー、ボンジュール。ニーハオ。ボンジュー
ル。ボンジュール。
妹 みなさん、まぼろしの世界です。こちらへど
うぞ。
兄 1億2千万人もいるんですよ。
妹 ここです。
兄 ふーん。こりゃいいや。なあるほど。こっち
上げたらだめなのかな。はい、それじゃよろ
しくおねがいします。
妹 まぼろしのしかけを見せてあげましょう。ティ
ロリロリロ。
兄 ワー。(拍手) ありがとうございます。さ
ようなら。はー、ついてるぞ。こっちにコロー。
早くコロー。アアアアアアアアーブ
妹 タララララ。ピカー。
兄 アアアアアアアアーブ。アアアアアアアア
ーブ。
妹 ピカー。
兄 アーブ、アーブ、アーブ。アラアラ。
妹 お兄ちゃん、ここ見せて。足の。
兄 ほくろ、あるよ。
妹 前からあった？
兄 ここ？ねえ。ずっと前からあるよ。生まれた
ときからずっとある。
妹 なかったけど。

b

- 兄 もしもし、〇〇ですが、こんにちは。あので
すね、今、××にいるんですが。(電話相手の

応答、内容不明)

- 妹 はい。
兄 はい。あのお父さんいますか。お父さんいま
すか。はい。そっちへ行ってもいいですかと
いうことなんですけど。
(相手の応答、不明)
兄 △△ちゃん、今、いっしょに行く？
妹 うん。
兄 2人です。ぼくと△△ちゃん。
妹 ウォーウォーウォーウォー。
兄 すいません。なんか。
(相手の応答、不明)
妹 あたしに代わってよ。
兄 お父さんです。カラオケは、夕方のことだから。
はい、はい。
(相手の応答、不明)
妹 プリプリプリ。
兄 カラオケに、なんか、4人で行くっていうん
だけど。
妹 4人、4人。おばちゃん仕事。4人、4人。
半熟おむすび。たまご、トマト、半熟でしょ。
兄 はい、すみません。(電話切る)
c
兄 ××さんもいっしょに行くんでしょ？
母 知らない。いっしょに行けるなら、いっしょ
に行けばいいでしょ。
兄 いっしょに行けばいいとおかあさん思っ
てるの？
母 うん。
兄 わかった。ちょっとおトイレする。(トイレを
すませる) さあ、いくよー。
母 どこ行くの。あんた。
兄 行くよー。
妹 あたしもー。どこ行くの？
兄 □□だよ。
妹 オーケー。
母 どこに行くの。
妹 □□よ。
母 何しに行くの？
妹 わかんないよ。お兄ちゃんが行くって言って
たんだもん。△△はわかんないよ。

母 いいって言われてないでしょ。
 妹 うん。わかんないよ。だってさっきね、□ □のとこに、かけたんだもん。
 母 だれ？
 妹 お兄ちゃん。
 母 △△ちゃんは？
 妹 あたしもいいんだもん。まだあたしね、8月の絵、全然かいてない。本当だよー。うそついてないよー。エンマ様に舌ぬかれてないよー。ねえねえ、これ知ってる？だれがどうなるか。
 兄 △△ちゃんの、はいてくよー。
 妹 あの、お兄ちゃんの、捨てちゃだめよ。お守り。おかあさん守ってくれんだから。どろぼう入ってきたら。
 母 トイレだいじょうぶ？
 妹 だいじょうぶ。タンタンタンタン。タンタンタンタン。
 母 じゃあ、帽子かぶって行きなさいよ。
 妹 ああ、あたりまえでしょ。お兄ちゃん、お兄ちゃん、どこー。
 兄 こっち。
 妹 エー？おそろいの服なんだよ。おそろいのシャツ。
 母 △△ちゃん、袖まくってあげようか。
 妹 え？
 母 袖まくってあげようか。いい？
 妹 うん。お兄ちゃんは寒がりなんだから。
 兄 ティリリリ。長野地方気象台……。ああ、アトラス・メイト持ってこう。
 母 ちゃんと手を貸しなさい。
 妹 イヒヒヒヒ。
 母 だめ。ちゃんとしないとそれじゃ。手を洗っていらっしゃい。手がくさい。
 兄 行ってきます。
 母 お兄ちゃん待ちなさい。△△ちゃん手洗いなさい。
 妹 はいよ。
 母 お兄ちゃんも手洗いなさい。
 兄 え？
 母 あなた手洗ってないでしょ。
 兄 だいじょうぶだよ。そんなの。

3場面の会話時間、会話場所、会話者、会話時点での行為は表2に示した。会話内の敬語の種類と数¹³⁾、使用者については表3に示した。

表2 採録条件

項目\場面	a	b	c
時間	13分55秒	1分42秒	4分30秒
場所	寝室	居間	居間 玄関 子供部屋
会話者	兄妹	兄 (電話相手) 妹	兄妹 母
会話時点の行為	遊んでいる	電話をしている	出かける用意 をしている

表3 敬語数

場面	a	b	c	計
会話者 敬語の種類	兄妹	兄妹	兄妹 母	
尊敬語	2 3	5 1	3 8 11	33
謙譲語	3 1	0 0	0 0 2	6
丁寧語	5 5	10 2	3 4 3	32
計	19	18	34	71

a 場面では、兄妹がつくった「おはなし」の世界に入るときに敬語が使用されている。b 場面では、家族以外の人と話すときに敬語が使用されている。c 場面では、母から兄妹に対して指示命令が行われるときに敬語が使用されている。

3種類の敬語の使用順位は、尊敬語と丁寧語がほぼ同数で、謙譲語が最下位である。ただし尊敬語の例は「お兄ちゃん」「△△ちゃん」「おかあさん」「お父さん」の家族間敬称の頻度が高い。謙譲語の順位が低いのは必要度が低いものと思われる。使用の難易も順位決定に関係するものと考えられる。

3場面の会話時間が異なるが、同じ時間だけ会話をすると仮定して計算すると、敬語使用頻

度は $a : b : c = \text{約} 1 : 8 : 6$ となり、もっとも多いのは b 、次いで c 、 a の順になる。すなわち家族間の会話と家族以外の人との会話では、家族以外の人との会話に敬語使用がより多くあらわれる。また家族間の会話では、きょうだい間より親子間に敬語使用がより多くあらわれるという結果になる。

6. 結 論

5章の採録ケースは、小学校低学年、中学年の兄妹によるものだが、おおよその社会的な敬語意識は獲得されていると思われる。すなわち家族間においては、きょうだい間より親子間のほうが敬語使用頻度が高い。家族間より家族以外の人との会話のほうが敬語使用頻度が高い。また、兄妹が日常と異なる虚構世界に入るとき(5章aのケース)は、兄妹間では日常使用しない敬語を使用する。このケースの遊びにおいて、兄妹は「みなさん」を「1億2千万人」も人がいる「明るいまぼろしの世界」に案内する。兄妹以外の他人を想定した架空世界にいるのであるから、当然そこには家族の枠内にとどまらない社会的な関係意識が存在するものと考えられる。

これらの事実は、社会的関係意識が高くなると敬語使用頻度が高くなることをあらわしていると考えられる。

尊敬語、謙讓語、丁寧語のうち、使用頻度のとくに低い敬語は、謙讓語である。これは謙讓語の使用難度が高いことによるだけでなく、近年の敬語簡略化傾向下では、間接敬語が回避されやすいことをあらわしているものと考えられる。

5章の例は現代の1つのケースにすぎないが、日本の散文文学における会話文の始発というべき『古事記』のきょうだい間会話でも、2章で述べたようにこれと同様の傾向が認められる。またこの傾向は、3章、4章の近代小説やテレビドラマシナリオにおいても同様と考えられる。きょうだい間では敬語を使用しない、または使

用頻度が低いのが一般であるが、そこに身分差などの社会的関係意識や、心理的優劣関係などの条件が加わると、敬語が使用されたり、敬語使用頻度が変動したりするのである。時代が異なり、社会構造、政治制度等が異なる各作品中のきょうだい間会話、及び現代の実生活でのきょうだい間会話に共通的傾向が見られる点が興味深い。

そもそもきょうだい間においては社会的要請から敬語が必要とされることもなく、ことさらに言葉で相手に敬意や好意を伝える必要もない。敬語の需要度は低いものと考えられる。情愛のあることが互いに確信できれば、言葉による敬意伝達などは不要であろう。

本稿は岡野共同研究「言葉と人間関係」の一環としてまとめたものである。これを端緒とし、今後継続して、人間関係が言葉を生み出し、言葉が人間関係を決定していく様相を考察していきたいと考えている。

注

- 1) 芳賀純「言語に関する一般的知識(2)」(飛田多喜雄、小林一仁編『最新中学校国語科指導法講座12』明治図書、1984)
- 2) A. マレービアン、西田司・津田幸男・岡村輝人・山口常夫訳『非言語コミュニケーション』聖文社、1986、p. 98
- 3) 南不二男『敬語』岩波新書、1987
- 4) 引用は、西宮一民編『古事記』(桜楓社、新訂版二刷、1987)によった。
- 5) 本居宣長『古事記伝一』1771(『本居宣長全集第9巻』筑摩書房、1968、p. 36)
- 6) 古賀精一「古事記における会話引用——白、奏、詔、告の用字法——」(『古事記年報』2、1955)
- 7) 壬生幸子「古事記の「汝」の用法」(『神田秀夫先生喜寿記念 古事記・日本書紀論集』続群書類従完成会、1989)
- 8) 『国立国語研究所報告77 敬語と敬語意識 岡崎における20年前との比較』三省堂、1983
- 9) 引用は、『漱石全集 第六巻』(岩波書店、1994)によった。

- 10) 引用は、『幸田文全集 第七巻』(岩波書店, 1995)によった.
- 11) 引用は、『NHKテレビ・シナリオ はね駒』(日本放送出版協会, 1986)によった.
- 12) 引用は、『北の国から'89帰郷』(理論社, 1989)によった.
- 13) 数については, 原則として単語ごとに数えた.
ただし「お兄ちゃん」「お父さん」など家庭内敬称については「お」「ちゃん」「さん」を個別に数えず, 1単語として扱った.